

## 「京城」という都市空間—金史良の「天馬」をめぐる

The Urban Space of “Keijo” : *A Flying Horse* by Saryang Kim

朴 銀姫  
Yinji Piao

### はじめに

金史良<sup>キムサリヤン</sup>が植民地出身の日本語作家として頭角を現わしたのは1939年の秋頃である。短編小説「光の中に」が『文藝首都』10月号に発表され、翌1940年上半期の第十回芥川賞候補作に選ばれたことをきっかけに、金史良は戦前日本の文壇によく知られた朝鮮人文学者の一人となった。金史良は常に明と暗、肯定と否定、希望と絶望、追求と挫折の狭間で創作活動を行ってきた。金史良の作品のほとんどは暗い所を背景にしているが、小説世界に登場する主人公たちには光を追い求めることを放棄しない人物が多い。それは、「光の中に早く出て行きたい」という金史良の暗黙のメッセージでもあるだろう。

金史良の本名は金時昌である。1914年、朝鮮平安南道平壤府の裕福な家庭に生まれた。父親は保守的で頑固な士大夫であり、母親はアメリカで教育を受け、平壤市内でデパートを経営する資本家であった。1930年、金史良は平壤高等普通学校在学中、朝鮮各地で起こった反日同盟休校に参加し、翌年同盟休学の主謀者の一人と目され、退学処分を受ける。そこで、同年12月に京都帝国大学法学部に在学中の兄の紹介で日本へ渡った。その後旧制佐賀高等学校を経て、1936年4月、東京帝国大学文学部独文科に入学し、同年10月28日、朝鮮芸術座に対する一斉検挙により連行され、およそ二ヶ月間本富士警察署に未決勾留された。

1939年、金史良は東京帝国大学を卒業する。その頃から朝鮮と日本を往来しながら両言語による旺盛な創作活動を始めた。1941年、金史良は思想犯予防拘禁法により鎌倉警察署に拘禁され、翌年1月に釈放された。その後平壤に帰郷し、1944年から朝鮮大同工業専門学校でドイツ語教師として働いた。1945年2月、「在支朝鮮出身学徒兵慰問団」の一員として中国へ派遣された金史良は、5月に日本軍の封鎖線を突破し、延安の華北朝鮮独立同盟・朝鮮義勇軍に加わった。日本敗戦後、金史良は朝鮮義勇軍の先遣隊として帰国し、北朝鮮で作家活動を続け、文学芸術総同盟副委員長を務めた。1950年6月、朝鮮戦争が始まると朝鮮人民軍に従軍して南下し、同年10月、アメリカ軍の仁川上陸に遭って朝鮮人民軍が撤退する中、持病の心臓病が急に悪化し、江原道原州付近で落伍した。その後、行方不明となり、死亡したと推定されている。

金史良文学に関する研究は、日本、北朝鮮及び韓国を中心に為されてきた。

日本<sup>1</sup>において金史良は、「在日朝鮮人文学」の先駆者として位置づけられている。さら

---

<sup>1</sup> 日本においては、1954年に『金史良作品集』（理論社）が出版され、1973年に『金史良全集』全四巻（河出書房新社）が発刊された。編者は主として在日朝鮮人文学者たちであった。彼らの研究は、主に作家の生涯についての整理や作品の翻訳に留まっていた。こうした作業は、金史良文学の本格的な紹介であるとともに「在日朝鮮人文学」の存在を世に知らしめる重要なきっかけとなった。金史良を「在日朝鮮人文学」の先駆者としての位置づけたのは、まさにこうした研究であったと思われる。在日韓国人評論家である安宇植は1972年に『金史良—その抵抗の生涯』（岩波新書）を、1983年に『評伝金史良』（草風館）を発表した。作家に関する歴史資料や証言に基づいた安の著書は、金史良の生涯について概説する作家論として重要な意味を持っている。また、磯貝治良の『始原の光—在日朝鮮人文学論』（創樹社、1979年）、川村湊の『生まれたらそこがふるさと—在日朝鮮人文学論』（平凡社、1999年）、林浩治の『在日朝鮮人

に、被植民地朝鮮の悲惨な暗黒面を描き出すことによって、植民地支配・圧政を暴き出した抵抗の民族作家と評価されている。

一方、平壤出身であり、解放後は主として北朝鮮で作家活動を行ない、朝鮮戦争の時に亡くなったと推定される金史良であるが、彼に対する北朝鮮<sup>2</sup>の評価は必ずしも高いものではなかった。1955年に『金史良選集』が出版されてから、1985年に殷鍾燮の論文「偉大な領導にしたがってわが小説文学が歩んできた栄光の四〇年」が『朝鮮文学』（1985年6号）に掲載されるまでの三〇年間、金史良の名は北朝鮮の文学史から消えたままであった。北朝鮮において、金史良文学研究が本格的に行われ始めたのは、1990年代に入ってからであった。

また韓国<sup>3</sup>においても、金史良の作品集が初めて出版されたのは1980年代の後半のことである。韓国では、日本帝国の政策文学への加担者という批判と、迂回的な書き方で消極的抵抗を行なったという好意的な省察が並存している。韓国における金史良研究がかなり遅れていた理由は、大きく三つの点から整理することができる。第一は言語問題である。これは北朝鮮と同じく翻訳の問題や民族感情の問題から理解できる。第二は思想問題である。金史良は北朝鮮出身であり、共産主義者である。解放後は北朝鮮に帰郷し、朝鮮戦争の時には朝鮮人民軍の従軍作家として活動した。第三は政治問題である。朝鮮半島の南北分断の歴史や分断文学史に起因する諸制約から、金史良の文学作品は忌避の対象となり、評価が与えられなかった。

植民地朝鮮に生まれ、朝鮮戦争の中で三六歳の生涯を終えた金史良は、現在に至るまで多様な解釈を惹起し続けている。また、ダブル・バインドに追い込まれた植民地時代作家の作品が、後世の読み手によって評価が分かれることの意義を問い質すことも重要な作業である。日本、韓国、北朝鮮における金史良研究は活発に継続されている。本論文では、従来の金史良研究を踏まえ、新たな研究方法を模索していきたいと思う。

---

日本語文学論』（新幹社、1991年）などは、金史良文学を「在日朝鮮人文学」の一環として扱いながら、簡単な作品紹介や分析を行なっている。

<sup>2</sup> 北朝鮮においては、1955年に『金史良選集』（国立出版社）が発刊され、その後1987年に『金史良作品集』（平壤文芸出版社）が出版された。1991年、平壤社会科学出版社から刊行された『朝鮮語文』に、金日成総合大学の金明熙の「金史良とその従軍記」が掲載された。金明熙は、金史良を金日成と党に忠誠を尽し、祖国解放のために命をかけて戦った愛国作家として取り上げ、金史良の業績を金日成偶像化のための道具として扱った。2009年3月、『現代朝鮮文学選集』第四六巻として、『金史良作品集』（文学芸術出版社）が出版された。『金史良作品集』には、金史良の日本語作品である「太白山脈」と「無窮一家」が朝鮮語に翻訳されている。北朝鮮で金史良の作品集が出版されたのは、1987年の『金史良作品集』以来のことである。2009年版の『金史良作品集』の中で、殷鍾燮は「太白山脈」と「無窮一家」は「わが読者に特に知られているわけではない」と指摘し、これらの作品が解放後の北朝鮮において翻訳・紹介されたことが今までなかったことがその理由であると述べている。

<sup>3</sup> 韓国では1987年、安宇植の著書『金史良—その抵抗の生涯』の翻訳本『アリランの雨が』（ヨルウム社）が出版されるとともに、北朝鮮作家の作品が本格的に紹介され始めたのである。1988年に『韓国解禁文学全集』（全18巻、三星出版社）が刊行され、1989年『金史良作品集—驚馬万里』（東光出版社）が出版された。2008年、「光の中に」や「七絃琴」などの作品を収めた『金史良作品集』（知識古典千行社）と、「土城廊」、「尹主事」、「郷愁」などの作品を収録した『金史良作品と研究』（亦楽）が出版された。2009年、金史良に関する論文を収めた金学董の著書『在日朝鮮人文学と民族』（国学資料院）が発刊された。近年においては、韓国出身の鄭百秀や南富鎮が日本で金史良研究を行ない、その成果には目覚ましいものがある。鄭の著書『コロニアリズムの超克』（草風館、2007年）は、金史良の作品分析を通じて韓国の「植民地経験」と「脱植民地化」の相互因果関係を明らかにした画期的なポストコロニアリズム文化論である。南の『近代文学の朝鮮体験』（勉誠出版、2001年）と『文学の植民地主義—近代朝鮮の風景と記憶』（世界思想社、2005年）は、植民地体験の原風景がいかに継続・内面化され、自己の記憶として甦ってくるかについて様々な角度から考察している。鄭とは違い、南は金史良作品の中から幾つかのキーワードを選択し、他の文学作品と比較しつつ議論を展開している。二人の著書の方法論的な共通点は、金史良作品を通してポストコロニアリズム文化論の新たな可能性を追求したところにある。二人の著者は、その後の金史良文学研究に対して新しい視点や研究方法を示唆したと考えられる。

## 1. 「天馬」というテキスト

金史良は1940年の『文藝春秋』6月号に小説「天馬」を発表した。「天馬」は、近代朝鮮の言語横断的な文化状況、特に日本語が「国語」化されていく歴史状況を、物語発生の背景としている。さらに言うなら、植民地末期の文壇における日本文学者と朝鮮人文学者の関係、つまり支配／被支配、作用／反作用の相互関係を、言語をめぐる葛藤の物語として提示している。

韓国の近代文学評論家金允植は『韓日文学の関連様相』において、「天馬」は植民地末期に実在していた文学者をモデルとしたと述べている。主人公の朝鮮人「国語」小説家玄龍は、大江龍之介という創氏名を持つ金文輯<sup>4</sup>であり、「東京文壇の作家田中」は、京城駐在のゴム会社職員で小説家の田中英光である。また、「U誌の大村」は『緑旗誌』や緑旗連盟の責任者である津田剛、「官立専門学校教授の角井」は、当時延禧専門学校校長の辛島驍であったとされている<sup>5</sup>。さらに、金允植は「無気力な一九三六年の韓国評壇に、一匹の鴉が現われた<sup>6</sup>」と、金文輯論の冒頭に記している。これは現在までも朝鮮近代文学の無頼漢、性格破綻者、パフォーマーとして記憶されている金文輯のカリカチュア的肖像画である。これに加え、日本の文芸批評家である川村湊は、「女流詩人の文素玉」は盧天命であり、「東京のある知名な作家尾形」は林房雄であると推測している<sup>7</sup>。

無論、作中人物たちを実在の文学者たちと重ね合わせたり、両者の関係の真偽を検証したりする実証主義的な方法は重要ではある。しかし、本論では多くの研究者が「天馬」をモデル小説として扱うほど、この作品が植民地末期の朝鮮文壇の状況をリアルに反映しているということだけを、テキスト解釈の前提として把握しておくことにしよう。

「天馬」に登場する玄龍は親日文学者として描かれている。玄龍は日本の文学者たちとの交流を背景に、また朝鮮においては京城文壇の黒幕をバックに持つことによって、京城文壇の寵児となる。しかし、彼の全盛期は非常に短いものであった。

玄龍は、ある事件に関連してスパイの嫌疑を受け、U誌の責任者である大村から二日以内に頭髪を剃り寺に行き修業するように命じられた。そうした命令の撤回を、玄龍は大学の同期である田中に依頼しようとした。この部分は、飲み屋で大村に会った玄龍が、他の日本文学者たちの前で大村に詰責される場面である。

大村が飲み屋に入る前に、玄龍は「大村君と力を合わせて、朝鮮民族を改良するために努力しているんだ<sup>8</sup>」と言う。こうした玄龍の虚言は、「国語」作家としての自分の存在を最大限にアピールするための表現にほかならない。彼はさらに、朝鮮人は「固陋な思想か

4 金文輯は、1930年代後半の朝鮮文壇（京城文壇）で活躍した評論家である。東京留学から帰ってきた彼は、新しい文学批評の方法論を身につけた若い評論家として、『東亜日報』の学芸部を中心に目覚ましい活動を行なった。これには『東亜日報』と対立関係にあった『朝鮮日報』で崔載瑞が主知主義的な文学論を展開していたのに対し、『東亜日報』側が金文輯を盛り立てようとしたというジャーナリズムの事情も関与している。金文輯はその『批評文学』の巻頭的一篇「言語と文学個性」の中で、「朝鮮の個性とは何か？それは朝鮮的な全内容である。朝鮮的な全内容とは何か？それはほかでもなく血の花としての朝鮮語の総和だ！」（青色紙社、1938年、8頁）と主張している。さらに、「文学はこの記号の総和であり、朝鮮文学は朝鮮語の記号の総和だ」（10頁）、「言語を研げ。言語の朝鮮を磨け。言葉を研ぎ、言葉を磨くこの作業において朝鮮文学は始終する」（11頁）と述べている。

5 김윤식 《한일문학의 관련양상》, 일지사, 1974년. (金允植『韓日文学関連様相』、一志社・ソウル、1974年、39頁。)

6 김윤식 《한국근대작가론고》, 일지사, 1974년. (金允植『韓国近代作家論攷』、一志社・ソウル、1974年、161頁。)

7 川村湊「金史良と張赫宙」『近代日本と植民地6—抵抗と屈従』、岩波書店、1993年、210頁。

8 『金史良全集I』、河出書房新社、1973年、94頁。

らぬけ出て、東亜の新事態を確認し、そしてひとえに大和魂の洗礼を受ける<sup>9)</sup>べきだと叫ぶ。ここでいう「東亜の新事態」とは、日本帝国が主張してきたアジア主義のスローガンであり、「大和魂」がその根底にある天皇制のイデオロギーであることは言うまでもない。玄龍のこの発言には、彼が自民族の文学者たちから「親日文学者」と排斥・批判される理由がある。

しかし、玄龍のこのような発言に対して日本人文学者たちは不愉快な態度を示す。特に大村は憤激している。「君は内鮮一体内鮮一体と気違いのように叫び廻るけれど、朝鮮人は誰一人君を相手にしないそうじゃないか。もう少し反省するんだ。まともな人間に帰れと云うのじゃ<sup>10)</sup>。いったい、玄龍の卑屈な姿勢や、日本人文学者たちの嫌悪はどのようにして生じたのであろうか。

その原因が玄龍の非常識な行動や性格にあると、簡単に断じることはできない。なぜなら、玄龍の言動は自分が「日本」への完全な同化を成し遂げたことを周りに誇示するためのものに過ぎないからである。つまり、真の「国語」作家であることを妄想したことこそが、日本人文学者たちの嫌悪を呼び起こした原因なのである。さらに興奮してしまった大村は、「全く恩知らずの悪い奴め！まだ君の悪いことが分らんのか。内鮮一体ちゅうのは君のような人間の魂まで引上げて内地人同様にしてやることなんだぞ<sup>11)</sup>」と叫んだ。

ここで強調されているのは、玄龍の隷属的な立場である。一時大村に取り入り重用された玄龍は、自分の民族性を捨てることによって忠誠を尽くす。しかし、玄龍が卑屈な姿勢を見せれば見せるほど、大村の彼に対する嫌悪は増大していく。こうした卑屈と嫌悪の相互作用が、玄龍が大村に捨てられ、狂人になっていくという物語後半を形成している。そこには、大村の排斥にもかかわらず、同化を求めつづける玄龍と、玄龍の従属にもかかわらず、排斥しつづける大村との対決が明確に描き出されている。すなわち、他者の同化を強調しつつも、完全な同化は許さないという日本人の自己矛盾がもっとも明白な形で現われているのである。そこにはまた、他者への完全な同化が許せないからこそ、狂人のようにその同化を求めるという「親日文学者」の内的論理もよく示されている。つまり「天馬」は、帝国主義的な同化政策に潜む不可能性を様々な形で形象化しているのである。

「大村が玄龍を重用する」と「玄龍が大村に重用される」は、同一の事態を二重類の形で表現している。対象物を表象し、それを伝達するという言語的機能からすれば、この二つの表現の意味論的な差はそれほど大きくない。だが、その表現を構成していく語り手の視点からすれば、それぞれが提示する対象物のイメージはまったく相反したものになる。「する」という表現には、行為の始発動機を大村が握っているという意味が具現化されている。一方、「される」という表現には、行為結果に対する責任が大村にあるという意味が刻み込まれている。つまり、「天馬」には「される」という表現が戦略的に取り入れられていると解釈することができるのだ。このことは、玄龍の同化意識に、日本人文学者たちの「指導」がいかにも暴力的に関与しているのかを明らかにするであろう<sup>12)</sup>。

また、玄龍の「重用される」から「捨てられる」という展開は、文学者としての創造力の問題にも関わりを有している。実際、「親日小説家」の作品には、文学的な芸術性や独創性を確認することが困難であった。当時の国家戦争総動員体制を充分描き尽すためには、作品の芸術性を放棄するしかない状況に直面していたからである。つまり、作品は「国家」理念の勝利というハッピーエンドで終わらなければならないし、「国民」共同体の「われわ

9) 同書、94頁。

10) 同書、95頁。

11) 同書、95頁。

12) 鄭百秀、『コロナリズムの超克』（草風館、2007年、213頁）を参照せよ。

れ」の主人公は「国家」の空想的なシナリオを実現しながら壮烈な死を遂げなければならないという創作イデオロギーの下で文学活動が行なわれたのである<sup>13</sup>。このような文化統制の中では、作家としての創造力を十分に発揮することはできなかった。特に、植民地末期の朝鮮人作家たちの創作活動は日本の検閲を経て行なわれることになった。つまり、「国語」文学の基準に合わせながら、自身の文学性を養うことはとうてい不可能だったのである。

小説は、玄龍が「僕は鮮人じゃねえ<sup>14</sup>」と叫びながら、雨の中を走り廻る場面で終わる。彼は、「朝鮮人であるがための今日の悲劇から胸ぶるいしてでも逃れたかった」と思い、「目だけを赤々と燃えたぎらせ狂った泥牛のように<sup>15</sup>」走り回る。この場面には、玄龍に代弁される植民地末期の朝鮮人知識人の狂気そのものが形象化されている。玄龍は、自分の名前は「玄の上竜之介」であると叫ぶ。すなわち、完全なる「日本人」になったことを自任した玄龍が狂気に囚われるところで、この小説は終わるのである。

小説の結末に見られる玄龍の狂気は、他者との関係（期待）の中に生じる自己の欲望を絶望的に編み変えたものである。「天馬」という題名からも窺えるように、玄龍は「天馬」になることを常に夢見ている。さらに言うなら、地上（現実世界）の馬ではなく、空を走り回る天馬になることを願っている。ここには、被支配者の「無知」を乗り越え、「文明化」された「国語」作家として「日本」文壇で活躍したいという欲望が象徴的に表現されている。玄龍の欲望は、植民地末期の一部の朝鮮人知識人たちの内面を代理的に表象しているのだ。

しかし、ここで注意しなければならないのは、玄龍の欲望は、彼が望まなくても発動される社会的なプロセスであり、「親日派」という結果に到達する歴史のプロセスであるということである。玄龍の欲望は、自分に欠けているものを望むことではなく、植民地朝鮮という社会から要求されているものに答えることである。つまり、玄龍の欲望は彼自身からというよりも、植民地という社会構造内から生まれてくるものである。

実際、朝鮮の文学者・知識人が日本の植民地政策や戦争政策を支持し、日本民族や天皇・天皇制を称揚する文章をもっとも多く発表したのは、「内鮮一体」を推し進める一連の皇民化政策の中においてであった。それは、植民地権力が様々な政策を通じて植民地民衆に皇民としての心構えを強制し、彼らがそれを自発的・日常的に再生産するようなシステムを構築しようとしたことと呼応している。しかし知識人や民衆の中には、保身や既得権確保のため、あるいは立身出世のために自ら進んで植民地体制に加担していく者も少なくなかった。また、満州国の成立や日中戦争の展開など、日本の圧倒的な力の前に朝鮮独立への展望を失い、民族差別から脱出する道を「内鮮一体」に見出そうとする者もいた。そこには少なからず、「朝鮮は植民地ではない」という自己欺瞞の意識が作用していたと思われる。言い換えれば、そのような自己欺瞞こそが欲望の一形態なのである。つまり、自己欺瞞や自己脱出は、人間が欲望の挫折を処理するときの、一つの反動的な形式である。この反動的な形式に、欲望は新たな出口を見出そうとするのである。

親日派が究極的に朝鮮語や朝鮮服、祖先崇拜など、朝鮮的なものをすべて否定し、ひたすら天皇の「慈愛」に抱かれつつ日本人に成りきるべきだと主張したとき、その内面にはどんな思想が潜んでいたのであろうか。人間は、自己の欲望の正当性を主張するために様々なフィクションを作り出す。それが、自己を理解しようとする際の最初の欲望心理なのである。親日知識人の場合、そこには開化思想以来の文明化論、アジア主義、社会進化論と

---

13 同書、215頁。

14 金史良、前掲書、103頁。

15 同書、102頁。

いう「想像的」なものが、屈折した形で織り込まれている。それは、親日派として断罪されることになるとはいえ、朝鮮近代史を生き延びた知識人たちの欲望の一つの表現であったと思われる。

代表的な親日作家である李光洙は、朝鮮併合に憤慨すると同時に日本の力を思い知り、実力養成の必要性を痛感した。彼は、1922年に『民族改造論』を著して物議をかもした後、実力養成の改良主義運動に邁進した。しかしこの間、李光洙は社会を見る眼を大きく変え、優勝劣敗・適者生存的な社会進化論にも決定的な疑問を抱くようになった。つまり、生存競争を否定し、人類を利己的闘争本能の苦しみから救う原理を「愛」に求めるようになった。それは、力による上昇が不可能であることを悟り、代わりに「愛」による支配を望むことであったが、そこには自分を愛してくれなかった他人に自己を捧げるという思想への転換があった。それはナショナルなものの根幹を国家と民族とに区別し、民族を救うために日本国家に寄り添うという構図として理解することもできる。

李光洙の「愛」の理論は、文学的・情動的であり、主体性の喪失という敗北感を漂わせるものでもある。これはまさに、植民地時代を生き延びた親日派の「論理」であり、また日本帝国末期に朝鮮人学徒志願兵たちが示した精神構造でもあった。これも、植民地時代を生き延びた世代のもう一つの姿であるように思われる。

「天馬」における玄龍の「狂気」や、親日派知識人である尹致昊の「自発性」の理論、李光洙の「愛」の理論は、彼らの自我の欲望に根ざす内的論理であった。知識人の欲望とは、常に自分の物語を作り上げるようとする欲望なのである。欲望とその自己理解は、ラングとパロールのような関係にある。欲望は多様性を有しているように見えるが、エゴイスティックなものであるという一般性を有してもいる。つまり、親日知識人によって欲望の対象や方法は違っても、それが自己から発するという点においては同一と言えるのである。言い換えるなら、彼らは植民地朝鮮から脱するという一般的コード（ラング）を用いて、それぞれの表現（パロール）を展開したのである。

だがここで、指摘しておきたいことがある。ホミ・バーバは、植民地化された地域の人々が支配者の文化や言説に対して「適切な模倣」をすることを強いられ、結果として支配者の論理に「占有」されてしまい、「不適切な模倣」を通して自らを表現する可能性があることを示した。この意味で親日知識人の欲望は、自己の欲求に関係なく機能する社会背景の中から生み出された効果であり、それは自己の内に「欠如」さえも生み出すことになることである。すなわち、植民地体制に反発せず、それに対して「自発性」に加担さえしてしまうという欲望の表出が、「親日」という行為と密接なつながりを有していることである。さらに言うなら、「自己から生ずる」欲望とは、社会構造が「自己の内に生じさせる」欲望の代理表象にはかならない。したがって、今後の「親日」研究においては、自然発生的な「内部からの自発性」としてではなく、植民地時代という特殊な社会が生み出した「外部による自発性」として欲望の問題を考察していくことが必要である。

例えば、植民地支配という当時の切迫した状況に直面して、沈黙した金起林や迂回的な文章を書いた韓雪野など、様々な形で消極的な抵抗を行っていた作家も少なくなかったことに留意しなければならない。すなわち、「外部による自発性」を「内部からの自発性」へと転換してきたか、あるいは拒否してきたかという「自発性」の質的な差異は存在するのである。こうした差異を無視すれば、これからの「親日」研究はさらに大きな暴力を容認することになるであろう。

## 2. 「京城」という都市

「天馬」は、京城という都市空間を作品の舞台背景としている。本論文では、小説の虚

の空間に歴史的な実の空間を見出し、歴史の実像がどのような形で小説の虚の空間に取り込まれているのかを考察してみることにする。

植民地朝鮮の中心都市であった京城は、今の韓国のソウルである。当時の京城は、近代と前近代、植民地性と近代性が交錯、共存する都市として、まさに凝縮した近代朝鮮の実像とも言える場所であった。

京城は、500年以上（1940年時点）の間首都であり続けてきた歴史文化都市である。京城の元の名は漢城である。漢城府は朝鮮王朝の首都であった。朝鮮王朝は1394年から「漢城府」という名前を使用したという。1910年、日本帝国の朝鮮併合により、漢城（漢城府）という名は京城（京城府）に変わった。

朝鮮半島の集団的記憶の場所とも言える漢城には、開港以後（特に1894年以降）新たな都市イメージが加わるようになった。全遇容の「植民地都市イメージと文化現象」によれば、開港以後の漢城には「外国公館、教会、新式学校など西欧的建築物が出現し、電車や汽車など新しい交通施設が登場すると同時に、円丘壇、独立門、奨忠団、記念碑殿などの政治的象徴性を強く持った建造物も新しく建立された<sup>16</sup>」という。円丘壇は朝鮮時代の祭壇であり、1897年に再建立された。独立門は甲午改革以後、朝鮮の自主独立を記念するために建立されたものである。また、奨忠団は閔妃が殺害された後、朝鮮王朝の忠臣を祭るために1900年に作られた建造物である。こうした朝鮮王朝の政治性を表わす建造物は、近代的な建築物や交通施設とともに漢城の都市イメージを変換させた。

日本の植民地になる以前の京城は、集権的中世国家の首都として豊富なイメージを併せ持っていた。それは、街路網の配置、街路の幅、主要な建物の配置と規格などが、儒教的統治理念と風水的空間観に立脚して建てられた歴史文化都市であった。しかし、京城の植民地化が進展する中、中世都市的なイメージは自然と退色するしかなかった。

日清戦争の勝利を契機に、日本の商人たちは京城の中心街に進出することになった。1897年には日本領事館、日本居留民総代役場、商業会議所がすべて南大門通に移転・新築された。一方、この時期の日本人の新規移住も急速に拡大した<sup>17</sup>。日本人の新規移住者は、本町を中心として西側には南大門路、北には黄金町一帯、東には奨忠団公演周辺、南には龍山に至る地域へと、次第にその住居空間を拡大していった。同時に、新規公共建物の用途、規模、位置などは植民者が一方的に決定したもので、その建築行為は京城都市空間のイメージを根本的に変えた。

1927年、日本人町である南村には朝鮮銀行、京城郵便局、商業銀行、明洞聖堂、東洋拓殖会社などの高層建物がそそり立つのに対して、朝鮮人町である北村には旧宮殿や学校などの建物しかなかった。こうした建造物の位置や建物様式は植民地権力の意図をそのまま反映するものであった。植民地権力は近代的で威圧的な高層建物を南村に集中させることによって、京城における伝統的な都市イメージを変換させようとした。

また、朝鮮王朝時代の漢城の道路網は、景福宮の前—鍾路間の通り、鍾路、南大門—鍾路間の南大門通りという三大幹線道路を基本としていた。しかし1896年以後、日本人居留地の中心道路である本町通と南大門路が交差する地点（朝鮮銀行前広場）に、日本領事館、居留民団役所、京城郵便局などが建てられ、新しい象徴性を獲得した都市道路網が形成され始めた。特に、黄金町は南村の中心街路となり、京城の都市構造の中心も南側に移動した。さらに、本町、明治町、新町など日本人居留地の中心地域と、黄金町を連結することによって、南村の街路は近代的な道路に変貌した。

<sup>16</sup> 全遇容「植民地都市イメージと文化現象——一九二〇年代の京城」『日本の植民地支配と朝鮮社会』、日韓歴史共同研究委員会、2002年、208頁。

<sup>17</sup> 1885年当時、漢城居留日本人の人口は89人に過ぎなかったが、1895年には1839人、1910年には47148人に達した。（同書、211頁。）

アンリ・ルフェーブルは「空間政治に対する反省」の中で、「都市空間は常に政治的でイデオロギー的である<sup>18</sup>」と指摘している。これは無論、権力構造が空間上にそのまま具現化されるということではない。新たな権力は都市空間における既存権力の痕跡を消そうとするが、空間構造を完全にひっくり返してしまうことは容易ではない。また、都市住民たちは過去の痕跡に対する記憶を持った存在であり、それに立脚し慣性的形態を維持する存在でもある。

都市空間自体が政治的・イデオロギー的葛藤の所産である以上、都市内特定地区や特定建造物に対して、住民は政治的・イデオロギー的な反応をみせる可能性がある。さらに、それをイデオロギー的なイメージとして表現することができる。また、都市は街路名や建造物名によって都市住民一般の動きや視線を規制する。

換言するなら、都市のイメージは、都市を支配する権力の意図と決して無関係ではない。つまり、都市の住民は日常生活の中で常に権力と対面することになり、肯定的であれ否定的であれ、従順的であれ抵抗的であれ、それに対してそれぞれの反応を示さざるを得ない。「天馬」の中で玄龍は、自分を取り巻く都市空間のどっしりとした重みに圧倒され、権力の意図を受容するよう強いられている。

ある重苦しい雲の垂れこめた日の朝、京城での有名な廓<sup>くわ</sup>、新町裏小路のとある娼家から、みすばらしい風采の小説家玄龍がごみごみした路地へ、投げ出されるように出て来た。(中略)

本町通りと云えば京城では一番繁華な内地人町(日本人町)で、それは蜿蜒<sup>えんえん</sup>と東西に細長く連なっている。ようやく廓の出口を捜し当て、そこから本町五丁目へ玄龍がのっそり現われ出たのはもう十時すぎ、通りには人影も多く割り方賑やかだった。(中略)

わが京城は黄金通りを境界線として、その以北が純然たる朝鮮人街である。長谷川町から黄金通りへ出、茶房リラの前へ通りかかった時、玄龍は一寸覗くだけにしようと思いを突き入れ一亘り<sup>わた</sup>紫煙の中を見渡したが、そのとたんにわれ知らずにこりと笑った<sup>19</sup>。

「天馬」の語り手は、玄龍が「ある重苦しい雲が垂れこめた朝」に新町の遊郭を出てから、翌朝、幻覚や幻聴にうなされ黄金通りと新町の裏小路を走り回るまでの行動を描いている。したがって、小説の空間的背景は、玄龍が歩き回った場所ということになる。つまり、新町の遊郭、本町(京城で一番繁華な日本人町)、黄金通、長谷川通、そして鐘路通といった当時の京城の中心街を、玄龍は歩き回るのである。

「天馬」の中心的な出来事は、すべてがこの都市空間の中で生じている。例えば、言語選択の問題をめぐる評論家李明植と舌戦、乱闘騒ぎを起こした朝鮮文学者懇談会の会場は本町通の「明治製菓」、女流詩人の文素玉と軽薄な会話を交した場所は、長谷川町から黄金通に出た所にある喫茶店「リラ」、そして「Uの責任者」大村や東京からきた田中らの日本文学者に醜態を演じた場所は鐘路通にある飲み屋である<sup>20</sup>。

「天馬」の京城は、テキスト内部の空間である。それは、現実的な空間とは距離を置き、作中人物の活動地平を提示し、限定する枠組みとして機能している。つまり、歴史的な場

18 アンリ・ルフェーブル「空間政治に対する反省」『資本主義都市化と都市計画』、崔炳洙他編訳、ハンウル、1989年、234頁。

19 金史良、前掲書、69—74頁。

20 鄭百秀、前掲書、193頁を参照せよ。



所である京城は、いわば存在する「不在」である。テキスト内部の虚の京城は、実の京城である都市空間を内包しつつ排除するという相反する役割を同時に担っている。したがって、「天馬」が設定する場所は、京城という都市を象徴する空間ではあるものの、実の京城そのものではない。また、その空間の境界は、必ずしも実在する空間の境界に対応しているわけではない。むしろ、作中人物の行為が、テキスト空間の境界を顕在化させているのだ。

したがって、この小説を読むことは、テキストの内部に設定されている場所を登場人物とともに経巡ることを意味している。ここで注目すべきは、玄龍が日本語式の名称の街だけを歩いているということである。街路とは、その都市に居住したり、そこを通行したりする人々の身体を空間的に拡張する装置なのだ。「京城」という都市空間の方向や位置を示す標識である街路名が日本語化されているということは、植民本国の「国語」、「国民」文化がこの都市の人々の日常を強く支配していることを意味している。

植民地時代の京城の中心街は、1918年以後、朝鮮王朝の正宮であった景福宮と、周辺の離宮を囲む地域が整備されることによって形成された<sup>21</sup>。したがって、「天馬」が背景にしている京城の中心街には、日本名の街路以外にも、南大門通、光化門通、西大門通などの街が存在している。しかし、玄龍は夕方鐘路通の飲み屋を訪れる時を除けば、日本名が付けられた街や町だけをひたすら歩き回っている。

ここで、語り手の視点に従い、「本町通り」から「長谷川町の方へは行って」いく玄龍の位置移動を想像するならば、彼が南大門大路を通過しなければならないことは容易に推測できるであろう。しかし、玄龍が南大門通を通る場面は、「慌てふためきつつ廣場を突き渡って<sup>22</sup>」いくと描写されている。この描写からは、「天馬」の語り手が、意図的に南大門通という朝鮮名の街を避けているということが窺える。あるいは、玄龍自身がこの道を拒否していると捉えることもできるだろう。つまり、この空間に現実的に存在するはずの朝鮮名の街路が、物語世界から排除されるよう設定されているのである。実際「天馬」は、玄龍が日本名の新町を移動する場面だけをクローズアップしている。こうした空間的背景には、「国語」化された京城文壇やそれに従属する朝鮮人日本語作家たちの姿が重ね合わせに表象されていると思われる。

都市とは、時代の権力の様々な構造や痕跡が集積された空間である。ルイス・マンフォードの言葉を借りて言うなら、都市は「その発生当初から多様な象徴物の集積体であった<sup>23</sup>」のである。権力が都市に織り込もうとしたテキストは、読み手（住民）によってそれぞれ異なる方法で読解される可能性もある。そうした意味で、都市空間は権力の意思をそのまま表現する展示場というよりも、「権力が痕跡を残した社会葛藤と政治過程の物理的考証物<sup>24</sup>」なのである。

玄龍が「本町通り」を西の方に進み、長谷川通に入るまで、焦点は主として二つの場所に合わせられている。その二つの場所とは、「明菓あたりから通り出口の方」と「鮮銀前の廣場」である。

日本人町の繁華街「本町通」は、植民地首都京城に流入する植民本国の都市大衆文化が集約されていた場所である。そこには、京城在住の日本人や朝鮮人上層階級に近代的な文化や商品を提供する百貨店などが立ち並んでいた。「本町通」の中でも、「明菓あたり」とは一番賑やかな所であった。

<sup>21</sup> 同書、195頁。

<sup>22</sup> 金史良、前掲書、73頁。

<sup>23</sup> ルイス・マンフォード『歴史の中の都市』、金栄記訳、明実文化社、1990年、26頁。

<sup>24</sup> マイク・セヴィジ他『資本主義都市と近代性』、金旺輩他訳、ハンウル、1996年、165頁。

本町通りはいくら午前中でも明葉あたりから通り出口の方にかけては、人々の群でいつも氾濫する程に雑沓する。そそっかしく下駄を鳴らして歩く内地人（日本人、以下同じ）や、口をぽかんとあけて店先を眺める白衣のお上りさんや、陳列窓に出した目玉の動く人形にびっくりし合う老婆達や、買物に出掛ける内地婦人、ベルの音もけたたましく駆けて行く自転車乗りの小僧に、僅か十銭ばかりの運賃で荷物の奪い合いをする支械軍などで<sup>25</sup>。

この「明葉あたり」の場面描写からは、植民地における民族差別や階級差別を読み取ることができる。近代化された京城という都市空間の中で、その文化的商品を楽しんでいるのは、「下駄を鳴らして歩く内地人」や「買物に出掛ける内地婦人」など、一部の人々である。そうした都市空間は、「口をぽかんとあけて店先を眺める白衣のお上りさん」や「十銭ばかりの運賃で荷物の奪い合いをする支械軍」にとっては、決して到達することのできない「文明」の場所にほかならない。

植民地期に「日本以外の植民地域で最大の百貨店であった京城三越新館が、地上四階、延建坪二三〇〇坪、従業員三六〇人規模で一九三〇年に開店<sup>26</sup>」したのが、この「明葉あたりから通り出口の方」であった。日本人植民者の文化生活の中心地「明葉あたり」の都市大衆文化は、「白衣のお上りさん」や「支械軍」のような「植民地民衆の文化的欲望と末梢消費感覚を刺激し、支配／被支配の暴力性そのものを忘却させる装置<sup>27</sup>」でもあったはずである。こうした植民地近代文化を象徴する場所を、また「いつも氾濫する程に雑沓する」「人々の群」を、「天馬」は鮮明に浮き彫りにしているのである。

こうして、新しい街路網の形成や近代的建造物の築造などによって、京城の住民は「植民地的近代」を迎えるようになった。つまり、1930年代の京城の近代化は資本主義的な生活を広め、その結果、大衆の感受性もそれに適合する形で変化したということである。

「天馬」には、朝鮮人大衆の近代化への対応を描写する場面が極めて多く現われる。それは、植民権力と都市大衆のイデオロギー的立場が、都市空間においてどのように相互交差・相互浸透するかを具体的に示している。

所謂茶房の彼等も亦現在の朝鮮の社会が生んだ特別な種族の一つであろう。少しばかり学問はあるが職は与えられず、何もなすことがないので髪でもクラーク・ゲートル式に分けてみようといった手合とか、或はどこかに製作費を出すような莫迦息子はいないものかと、首をひねり合うちよび髭を生やした映画不良やら、何かこそと隅っこで企み合う金山ブローカー達、原稿用紙の束を片手に持って歩かねば芸術家でないと思いついでいる低級な文学青年、そういった連中ばかりだ<sup>28</sup>。

25 金史良、前掲書、72頁。

26 정운현 《서울시내 일제유산답사기》，한울，1995년。（鄭雲鉉『ソウル市内日帝遺産踏査記』、ハンウル、1995年、229頁。）

27 鄭百秀、前掲書、196頁。

28 金史良、前掲書、75頁。

テキストは、「朝鮮の社会が生んだ特別な種族」という表現を用いて、京城の近代化を体験する朝鮮の知識人たちを描いている。それは、「学問はあるが職」のない「髪でもクラーク・ゲブル式」に分けてみる若者、映画の「製作費を出すような莫迦息子」を探す芸術人、「金山ブローカー達」、「低級な文学青年」などである。彼らは、文化や近代化への欲望に突き動かされている朝鮮知識人階級の姿を生き生きと表現している。朝鮮人街に位置する「茶房」の中で、彼らは向こう側の文化的な生活に対してそれぞれの憧れを抱く。また、朝鮮人街の中心部である「鐘路裏」の描写からも、朝鮮大衆の近代化に対する姿勢を窺うことができる。

裏小路に出ればそこは所謂鐘路裏で、カフェー、バー、立飲屋、おでん屋、麻雀屋、周旋屋、飲食店、旅館等が、目をぴかぴか光らせたり、口を開けたり、尻ごみしたり、地べたにひつつくように蹲しゃがんだりしている。ぎーぎーとレコードが騒々しく辺り一面で唸り立て、洋服や白い着物がうろつき廻っている。景気のいい商人や、総督府あたりの朝鮮人雇員、無職で金のある青年、モダンボーイ、そしてカフェー音楽家、バーマルキスト等が、夜はよくこの界限で気焰を上げるのだった<sup>29</sup>。

朝鮮固有の都市空間の一つである「鐘路」には、既に多様な文化生活が入り混じっている。フランス語表記の「カフェー」、英語の「バー」、日本語の「おでん」、中国語の「麻雀」、また「立飲屋」には朝鮮語発音で「ソンスルチビ」とルビが振られている。こうしたエクリチュールは「鐘路」という場所の文化的・社会的状況を明確に代弁する機能を果たしている。さらに、町の一画では「レコード」が「唸り立て」、「洋服や白い着物がうろつき廻って」いる。近代化された「鐘路」の町、しかしそこにいるのは朝鮮人だけである。「景気のいい商人」、「総督府あたりの朝鮮人雇員」、「無職で金のある青年」、「モダンボーイ」、「カフェー音楽家」など、「文明」への感受性に溢れた朝鮮人大衆だけである。

当時の京城では日本人街と朝鮮人街が、きっちり分けられ、両者が交流することはほとんどなかった。在朝日本人たちは、日本での生活をそのまま京城にまで持ち込み、「内地」と変わらぬ生活をしていたのである。このように、当時の支配権力は同じ都市空間の中で二つの街を対比させることにより、朝鮮人の野蛮性を浮き彫りにし、日本の植民地支配が正当なものであると宣言しようとしたのである。

ここで注目しなければならないのは、植民地期京城の変化は、文化的背景や場所的記憶をまったく異にする異民族支配者が一方的に主導したものであるということである。つまり、この都市のイメージを変化させる主役を演じていたのは、当時の在朝日本人だったのである。ここで、朝鮮民衆の「愛国」思想を煽る時局雑誌Uの責任者大村の描写を取り上げてみよう。

「大村は角井や田中になりにやりと目配せをしてみせ、それから遠来の客もあることなので自分が朝鮮にいて如何に朝鮮人のためを思っているかを身をもって示さねばならぬと考えた<sup>30</sup>」。つまり、大村は朝鮮人の文明化を自己任務とみなしていた。ここには、支配民族としての優越性や余裕を感じつつ、朝鮮人を思う存分蔑視・嘲弄していた当時の日本知識人たちの典型的な姿が現われている。このような様子は、当時の新聞記事にも記されている。

<sup>29</sup> 同書、86頁。

<sup>30</sup> 同書、95頁。

本町は京城市街地の隅にあるが、なぜかそのように活気が充溢し和気が充満する。前後左右の家はすべて二、三階建てでぎっしり並び、鍾路のように低い家はない。暴走する物質文化や色とりどりの人々、その華麗燦爛とした様子は記者の目を驚かせた。反面、鍾路は真ん中に位置していても、総じて朝鮮旧式の家屋で、大きな人が立てば天井に当たってしまうほどであり、その姿も陳腐で凋落している<sup>31</sup>。

京城が近代都市に変貌し始めたのは1896年頃からであるが、それが本格化するのは1900年代末に日本人が京城の支配権を掌握してからである。それにともない、京城の近代化には植民地という現実がそのまま反映されることになったのである。

当時の朝鮮人たちはこの近代化された都市に無力感や悲しみを覚えつつも、その中に溶け込んで生きていた。彼らは、「日本人街」に圧倒された「朝鮮人街」の風景の中にも、植民地権力を象徴する近代的建物に威圧された旧王朝の象徴物の中にも、自らの立場を確認することができた。さらに言えば、帝国日本の自慢である「文明」が「野蛮」な方法で朝鮮文明を嘲弄し、陵辱するのを目にしたのである。

金光中の『ソウル 20 世紀—空間変遷史』によれば、「一九二〇年代前半までに築造された大規模建造物は、総じて官衙の建物や国策会社・銀行などの社屋であったため、建造物の位置および建物様式は植民地権力の意図をそのまま反映するものだった<sup>32</sup>」という。また、全遇容は「植民地都市イメージと文化現象」の中で、「新しい建造物はみな同じように権威的なルネサンス様式で築造され、植民地権力の威圧性を可視的に表現した<sup>33</sup>」と指摘している。

当時の朝鮮人は、日本人の新規建造物と朝鮮王朝の旧建物を常に一組のものとして認知していた。「日本人街／朝鮮人街」という対立はテキストでは次のように表象されている。つまり、「景福宮／総督府新庁舎」、「徳寿宮／京城府庁舎」、「南大門／商工奨励館」、「円丘檀／鉄道ホテル」といった二項的な図式が提示され<sup>34</sup>、それぞれが旧朝鮮と新朝鮮（日本支配下の朝鮮）との対立的なイメージとして機能していたのである。このような建物配置は、朝鮮人住民が有していた場所のイメージをそのまま踏襲し、その場所を「植民地朝鮮」の空間として仕立て上げてしまう。つまり、植民地朝鮮人たちは同一都市空間において「文明／野蛮」という対立を経験しながら、朝鮮人としての自己意識を形成していくことになった。この場合、京城という都市は、「朝鮮的なもの」の否定・蔑視を表象するテキストとして作用している。

テキスト中の「朝鮮人街」は「北村」を象徴し、「日本人街」は「南村」を象徴している。なかでも、「鍾路四街」と「鮮銀前広場」は、それぞれの街を代表する場所となっている。「鍾路四街」は「北村」を象徴し、非文明的で不潔な空間として描かれている。一方、「鮮銀前広場」は「南村」を象徴し、文明の町として認識されているのである。したがって、玄龍が次に移動する場所としては、当然ながら「鮮銀前の広場」が選ばれることになる。

「鮮銀前」という場所には、京城内の特定の階層、または民族だけが共有しているイメージが数多くある。つまり、「鮮銀前」のイメージは、階級意識や民族意識に影響を及ぼし、またそのような意識が「鮮銀前」の特定なイメージを強化することになる。

31 『毎日申報』1921年2月24日「市街地巡覧の感想」（全遇容、前掲論文、226頁）を参照せよ。

32 김광중외 《서울 20 세기- 공간변천사》，서울시정개발연구원, 2001년。（金光中他『ソウル 20 世紀—空間変遷史』、ソウル市政開発研究院、2001年、114頁。）

33 全遇容、前掲論文、217頁。

34 김기호외 《서울남촌- 시간, 장소, 사람》，서울시립대학교부설서울학연구소, 2003년。（金基浩他『ソウル南村—時間・場所・人』、ソウル私立大学附設ソウル学研究所、2003年、242頁。）

玄龍はこういう人々の波をくぐるように急ぎ足で通り抜け、鮮銀（朝鮮銀行）前の広場に出て立ち止った。電車が繁く行き交い自動車が群をなしてロータリーを走り廻っている。彼は慌てふためきつつ広場を突き渡って、向い側の静かな長谷川町の方へは行って行った。（中略）

白聖建の大きな朝鮮人経営の銀行前を通過して、いつの間にか鐘路四辻の方へ近附いて来た。急に辺りは騒々しくなり、人力車は走り自動車は流れ電車はもどかしげに警笛を鳴らしている。百貨店和信と韓青ビルの高層建築を起点として、東大門の方へ向って大通りを挟み立派な建物が海峡のように連なっていた<sup>35</sup>。

「本町通」と南大門が合流する地点に位置する「鮮銀」は、植民地経済の象徴である。「鮮銀」は、植民地住民の日常生活とは直接関わりはないかのように見えるが、実は植民地の経済システム全体を統轄する植民地経営の中核的機関である。「鮮銀」の広場の前では、「電車が繁く行き交い自動車が群をなしてロータリーを走り廻っている」。つまり、植民地住民の身体や意識を経済的装置によって統制するという点においては、植民本国の近代都市文化の場合と何ら変わるところはない。

「天馬」は主人公の移動を描写する中、「鮮銀前の広場に立ち止った」玄龍を特別な姿として捉えている。この物語では「朝鮮銀行」という正式名ではなく、「鮮銀」という略名が用いられているが、それは極めて重要である。テキストはまず「鮮銀」という略名を用い、その後に括弧付けで「朝鮮銀行」という正式名を記している。

言うまでもなく、「鮮銀」とは差別用語である。「鮮」という言葉に潜む植民地性をめぐる問題は、後世の研究者たちによって様々に議論されてきた。例えば、『文学の中の被差別部落像—戦後篇<sup>36</sup>』の第三章「大衆の目と底意をえぐる—金達寿と井上光晴」の中で、山岸嵩は次のように述べている。

二人（金達寿と金史良）の交流期間は短かったが、史良の位置から射しこまれた光と影はその後の達寿文学に無視できない。北鮮出身の史良が「川」をこえて故国に戻り、更に鴨緑江をこえてプロレタリアートの「祖国」に戻ったのに、南鮮出身の達寿は「川」を何往復もしたあげく、異国に戻る。そのことで史良は死ぬが、達寿は生きのび、生きのびた達寿は終生「川」を背負いこみ、向こう側はこちら岸より、こちら側はこちらにいる向こう岸の人間の位置より書きつづける<sup>37</sup>。

この著書は、発刊後まもなく読者たちから不適切な差別表現を指摘され、執筆者である山岸は次のような「訂正文」を出した。「本書八二ページにおける「北鮮」「南鮮」は、このことばのもつ差別的歴史と現在を深く考え次のように訂正します。北鮮→北部 南鮮→南部 筆者 山岸嵩」。

こうした経過を経て、出版社明石書店の主催で、1982年11月20日に第一回目のシンポジウムが、翌年5月21日に第二回目のシンポジウムが開かれた。二回のシンポジウムでは、「鮮」という言葉が差別用語であるかどうかという問題に議論が集中した。

もう一人の著者である梅沢利彦の反論の一節を引用してみよう。

<sup>35</sup> 金史良、前掲書、72—73、84頁。

<sup>36</sup> 梅沢利彦・平野栄久・山岸嵩『文学の中の被差別部落像—戦後篇』、明石書店、1982年。

<sup>37</sup> 同書、82頁。（ ）内は引用者による。

「北鮮」「南鮮」の「鮮」を差別語だとする論旨は、内海・梶村論文〔『北鮮』『南鮮』というコトバ〕『朝鮮研究』一五〇号、のち『朝鮮人差別とことば』明石書店所収〕に依拠していると思うが、疑問がある。「朝」の字を抜いたのは、朝廷恐れ多いからだというのは、うがちすぎだ。むしろ、日本史での南北朝時代との混用というほうが理解しやすい。また、地名を下の語で省略する仕方は、東京・横浜の「京浜」等々、よくある。下の語で省略したのが差別だというのは、わからない。それから、「鮮」が賤民の賤に通ずるという指摘があるが、音で比較するのは庶民では困難なわざであって、むしろ、新鮮な魚とか、日常用語的には「鮮」はいいイメージを与えるコトバだ<sup>38</sup>。

梅沢の反論はすべて言葉の遊びに過ぎない。朝鮮併合直後の時点では、朝鮮民族に対する蔑視や差別の意味合いを込めつつ、「鮮人」という言葉が使用されていた。日本は「朝鮮」から、「朝の国」という意味である「朝」を除き、「鮮」一文字で朝鮮半島を示した。つまり、「鮮」という用語には「内鮮一体」を唱える日本帝国の優越感と同時に朝鮮への民族差別意識が深く潜んでいるのだ。これは、中国を「支那」、ベトナムを「インド支那」と呼ぶのとまったく同じである。さらに言えば、朝鮮半島を表わす場合にも「鮮」の一字をもって表記することが、奨励・強制されていった。そして、そうした歴史的・社会的な趨勢の中で、「北鮮」・「南鮮」も差別語として認識されていったのである。

梅沢は、言葉の持つ歴史的な暴力性を完全に無視し、無意味な言葉遊びに興じている。こうした言葉の問題は、言葉の客観的意味合いとは基本的に無関係である。「鮮」という語自体が差別語でないことは言うまでもない。「鮮」という語をめぐる差別的用法は、日本が朝鮮を植民地化することによって生じたという点が重要なのである。さらに言えば、その時の言葉使いに被植民者に対する政策的な差別意識が潜んでいるという事実が問題なのだ。「鮮」という言葉自体にはどこにも差別性は存在しない。しかし、「鮮」という言葉に国家的・民族的な差別を織り込み、そこに「野蛮」あるいは「劣等」の意味を与えるという時代は確かに存在していたのである。

では、「天馬」においてはなぜ「朝鮮銀行」という正式名ではなく、「鮮銀」という差別用語が用いられているのであろうか。「鮮銀」とは「本町通」と南大門が合流する地点に位置する植民地経済の象徴なのである。この物語では、外部から内部に入り込む植民者たちがこの場所を支配していることがわかる。「南大門」という内部空間と「本町通」という外部空間の合流点に位置する「鮮銀」は、二つの空間の境界にはかならないのだ。

「鮮銀」は二度にわたってまず意味作用を遂行する。まず、語り手が「鮮銀」という言葉を使うとき、二つの空間が一致し、植民地都市京城が作り出される。この時、言葉の持つ差別性は植民地性へと転換される。次に、第二次的な転換を経て「鮮銀」は「朝鮮銀行」を代理する用語としてテキストの中に定着される。この時、「鮮銀」という言葉の持つ植民地性はさらに近代性へと変換される。京城という都市空間は、記号としての性格を奪われた中立的なカテゴリー、すなわち無限の意味を許容する代替的な場所なのである。語り手は「鮮銀」という言葉を用いることにより、多重性を孕んだ場所を暗示しようとしたと考えられる。また、「明菓あたりから通り出口の方」と「鮮銀前の広場」に焦点を置く語りには、京城という都市が植民地的な支配秩序によって完全に支配されている状況を確認することができる。

<sup>38</sup> 福岡安則他『朝鮮にかかわる差別表現論』明石書店、1992年、18頁。

## おわりに

「天馬」で玄龍が最初に登場する場所は「京城での有名な廓」である。つまり、テキストは日本式の娼婦街から始まり、その娼婦街に立ち戻る場面で終わりを迎える。テキストの空間的帰着点が娼婦街であり、主人公の自己回帰がその場所でなされているという点は極めて重要である。

新町の遊郭とは、京城の代表的な公娼の一つである。1904年6月、日本居留民会が日本人居留地付近の朝鮮人土地七千坪を買収し、遊郭を開業したのが、新町遊郭の始まりである。終戦後は日本人の退去とともに解体された。

玄龍は、その「新町裏小路のとある娼家」から、「投げ出されるように出て来た<sup>39</sup>」。しかし、彼はすぐ道に迷ってしまう。「どこをどう通れば抜け出られるか皆目見当がつかない」「右に折れるかと思えば又左の方へは行って<sup>40</sup>」しまう路地の中で迷っている。こうして、物語は娼婦街前の裏小路で玄龍が道に迷う場面から始まるのだ。そして、道に迷ってしまった玄龍が、再び娼婦街前に立ち戻ったというところで小説は結末を迎える。

玄龍は、「混乱の中」で歩き続ける。迷路の設定とは、身体の方向感覚を奪う空間であるということを知りぬいた巧みな演出であると言えよう。迷路としての街路は喪失してしまった、決して見つかることのない「自分」を捜すプロセスを出来事化する空間となる。だが、玄龍は迷路の中で無意識のうちに再び最初の街路に入ってしまう。彼は、「再びあの新町裏小路の蜘蛛の巣のような迷路には行っていた」が、「心の真底ではちゃんと自分が娼家界限へは行っていることを知って<sup>41</sup>」いたのである。玄龍は、記憶がないから道に迷うようにみえるが、実はその娼婦街に戻る道を彼は無意識的に覚えていたのである。彼は、自分が娼婦街へ入ったことを「知って」いたのである。言い換えるなら、玄龍は自分が「知って」いるということを知らなかったからこそ道に迷ってしまったのであり、また自分の反復行為に気づいたからこそ自己意識を回復したのである。この場合、玄龍の自己回帰は、彼の自己意識の回帰を意味する。

このように「天馬」は、主人公が徘徊する街や町の性格を、朝鮮人「国語」作家の植民地的な状況に対応させる形で提示している。朝鮮併合により京城という都市を掌握し、支配してきた日本帝国は、その都市に自分の権威を表わしてきた。したがって被植民者にとって、京城という都市空間は「聖なる」テキストになっている。このテキストは彼らによって読まれたり、注釈を施されたりするのではなく、強要的に暗記されられ、朗読されるのである。つまり、「天馬」に描かれる1940年前後の「ある重苦しい雲が垂れこめた朝」の京城の街の風景は、単なる物語背景ではなく、物語全体を支える意味構造そのものであると言えるのである。

## 参考文献

### (1) 金史良作品テキスト

『金史良全集Ⅰ』、河出書房新社、1973年

『金史良全集Ⅱ』、河出書房新社、1973年

『金史良全集Ⅲ』、河出書房新社、1973年

---

<sup>39</sup> 金史良、前掲書、69頁。

<sup>40</sup> 同書、69頁。

<sup>41</sup> 同書、102頁。

『金史良全集Ⅳ』、河出書房新社、1973年  
『光の中に一金史良作品集』、講談社、1999年  
『金史良作品集』、知識古典千行社、2008年  
『金史良作品と研究』、図書出版亦楽、2008年

(2) 金史良に関する参考文献

安宇植『金史良—その抵抗の生涯』、岩波新書、1972年  
安宇植『評伝金史良』、草風館、1983年  
磯貝治良『始原の光—在日朝鮮人文学論』、創樹社、1979年  
川村湊「金史良と張赫宙」『近代日本と植民地 6—抵抗と屈従』、岩波書店、1993年  
川村湊『生まれたらそこがふるさと—在日朝鮮人文学論』、平凡社、1999年  
金在勇他『親日文学の内的論理』、図書出版亦楽、2003年  
金允植『韓日文学関連様相』、一志社、1974年  
金允植『韓国近代作家論攷』、一志社、1974年  
鄭百秀『コロニアリズムの超克』、草風館、2007年  
林浩治『在日朝鮮人日本語文学論』、新幹社、1991年  
林鍾国／大村益夫訳『親日文学論』、高麗書林、1976年

(3) その他

梅沢利彦・平野栄久・山岸嵩『文学の中の被差別部落像—戦後篇』、明石書店、1982年  
金基浩他『ソウル南村—時間・場所・人』、ソウル私立大学附設ソウル学研究所、2003年  
金光中他『ソウル 20 世紀—空間変遷史』、ソウル市政開発研究院、2001年  
全遇容「植民地都市イメージと文化現象—一九二〇年代の京城」『日本の植民地支配と朝鮮社会』、日韓歴史共同研究委員会、2002年  
鄭雲鉉『ソウル市内日帝遺産踏査記』、ハンウル、1995年  
福岡安則他『朝鮮にかかわる差別表現論』明石書店、1992年  
アンリ・ルフェーブル／崔炳洙訳「空間政治に対する反省」『資本主義都市化と都市計画』、ハンウル、1989年  
マイク・セヴィジ他／金旺輩他訳『資本主義都市と近代性』、ハンウル、1996年  
ルイス・マンフォード／金榮記訳『歴史の中の都市』、明実文化社、1990年